

る。殊に本著中、法然の三昧発得や夢定相承等を肯認随善されていることは、学者であるとともに、宗教書である面目を鮮活ならしめていることでもあって、敬讀の念一入なものがある。

筆者は従来、坪井先生から浄土学の示唆を得ることが一再ならずあったことを、感謝の念に充ちて当禿筆を走らせるものである。今回当著を精読する暇のないまま、粗読程度で

竹内道雄著

『永平孤雲懷辨禪師伝』

鏡 島 元 隆

書評といふことは、烏滸の至りでもあり、礼を失することの憶いも浅くない。従つてまたこれは書評ではなくして、紹介という意味からのものである。否、当一大著述に対する限りなき讃嘆の内意からの拙文に他ならないことを特に強調したい。

(隆文館、昭和五十七年二月発行、A5判、七四五頁、九五〇〇円)

本書は、去る一昨年七百回大遠忌を迎えた

永平寺第二代孤雲懷辨禪師の伝記である。宗門における懷辨禪師の伝記としてまとまつたものは、五十年前の六百五十年大遠忌を記念して著わされた村上素道氏の『永平孤雲懷辨禪師』と大久保道舟博士の『永平孤雲懷辨禪師御伝記』とが存するが、両書とも今日では容易に入手できない書であるから、本書は懷

辨禪師伝記として好箇の入門書と言えよう。

著者竹内氏は、人も知る名著『道元』(吉川弘文館)の著者として、宗史界における第一人者であるから、まず執筆者にその人を得たことを喜びたい。

著者竹内氏は、本書執筆に当って、「學術的研究を基礎にしつつ、一般読者にも平易に親しめるもの」という姿勢を貫くことにでき

るだけ留意した」と述べている。この氏の意図は美事に果たされたものと言えよう。といふのは、氏は本書の伝述に当って永平寺本山の宝庫に入つて懷辨禪師について探索し得るかぎりの資料を検討吟味しているからであつて、そのことは本書の「附論」に付せられた「孤雲懷辨禪師の伝記史料について」をみれば、一見明白である。この生の伝記資料に立つて、本書は昭和五十年五月から五十六年一月まで、永平寺の機関誌『傘松』誌上に連載されたものを総括し、補訂したものであるから、一般読者にとつて親しみ易く、読み易いものであることはいふまでもない。

氏は、本書伝述を通して著者によつて新たに発見されたこととして、つぎの七点を挙げている。

第一は、懷辨禪師の生涯の重要な思想的課題の一つを、罪業意識の克服とみたことである。この罪業意識は、著者によれば懷辨禪師の臨終間際まで続いたのであつて、このことに氏は道元禅あるいは日本曹洞禅の展開史の上において重要な意味をみるのである。

第二は、その俗系について大胆な類推を行ない、父を藤原伊輔、母を平景清に縁りのある女性と断定していることである。これによ

って著者は、道元・懷葬師資が出家前すでに俗縁関係にあったとみるのである。

第三は、懷葬禪師と道元禪師の初相見のときに関わされた問答の内容が「正法眼蔵弁道話」になったと推定していることである。

第四は、『正法眼蔵隨聞記』を懷葬禪師によって選択され、体得された道元禪と位置づけていることである。著者によれば、『隨聞記』は懷葬禪師の大悟徹底に至る宗教思想と母への孝順心の軌跡を記録したものとみるのである。

第五は、懷葬禪師の道元禪師からの嗣法相続を、嘉禎二年(一二三六)十一月十八日、「一毫衆穴を穿つ」の語句による大悟の時節と論証していることである。

第六は、懷葬禪師が道元禪師に初相見以来、青年期から入滅にいたるまでの禪師の心の軌跡を可能なかぎり追求していることである。

第七は、右の追求の間に、永平道元―孤雲懷葬―徹通義介の日本曹洞宗の三祖の時代に、行・学両面に互って伝法・嗣法が徹底して行なわれ、この三代の間に日本曹洞宗発展の不動の行的思想的基盤が築かれたことを根本資料にさかのぼって究明していることである。

本書は、このように懷葬禪師伝記にとって従来明からでなかつた多くの問題に照明を与えた画期的な著であり、さらに曹洞宗史、曹洞宗学への重要な提案がなされている注目すべき書である。しかし、氏自身が認めているように、懷葬禪師の伝記および思想については、資料そのものが極めて少いのであって、その資料の著しい制約のために氏自身が多く類推の上に立たざるを得なかつたのである。従って、上に述べた氏によって導かれた新見解、新提案に対しては、資料の別な見方からすれば別の解釈が生まれてくる余地が残されてあることも否めない。

すでに竹内氏も承知のように、氏が主張される懷葬禪師の俗系について、父を藤原伊輔、母を平景清の縁者とする説に対しては、同じ永平寺から懷葬禪師七百年を記念して出版された『懷葬禪師研究』において、古川治道氏が反対説を述べている。(同氏、「二祖國師の俗縁について」。これは、同じ資料によっても別な見方ができることを証するものであろう。

いま筆者は、竹内氏によって提唱された七つの新見解、新提案の一つ一つについて、その是非を問題としないが、氏の資料のとり扱

い方についての素朴な疑問を提示したい。宗門上古史の研究にとっていちばん困難なことは、資料そのものが極めて少いということとあって、どの資料をとってどの資料を捨てるかの判定がむずかしいことである。一般的に言えば、古い資料の方が新しい資料より重んぜられるべきであって、新しい資料に付加されたものは、後世の歴史的社会的要請に基づく変化とみるべきであって、このようなことは専門の歴史家である著者に説くまでもないことであるが、本書を通読すると、この点に關する氏の資料のとり扱い方について疑問の起ることも否定できない。

たとえば、竹内氏は懷葬禪師が叡山で密教を学ばれたと論じているが、それは宗門の上古の資料である『伝光録』にも、『三大尊行状記』にも、いずれの資料にも記されていないことである。このことを氏は認めながら、「禪師が天台密教を研修したことは上に掲げた曹洞宗門内の諸伝記には記されていない。だが宗門外の元師蛮選述の『延宝伝燈録卷第七』には、「修頭密及浄業」とあり、「本朝高僧伝卷第二十」には「学頭密兼修浄業」とあってその事実には十分に類推される」として、懷葬禪師は密教を学ばれたとし

ている。しかし、言うまでもなく、『延宝伝燈録』（一七〇六）や『本朝高僧伝』（一七〇七）は江戸時代の書であり、しかも宗外の書である。このような後世の宗外の資料を取って、宗門上古の資料を捨てる根拠は何であろう。氏は「密教導入と密教実践の豊富な長い曹洞宗教団の発展史の上から逆に類推すれば」（本書五三頁）とも述べているから、後の教団の密教をとり入れた歴史の事実を懷持

禅師にまでさかのぼらしめたものとみられるが、このことは逆に言えば、そのような懷持禅師像は後世の教団の要請としての懷持禅師像であって、懷持禅師その人とは異なるのではないか、という疑問が起こるのも禁じ得ない。

田村芳朗・新田雅章著

『智顛』（人物 中国の仏教）

い。本書では、このような起こり得べき疑問に対して、十分な説明は示されていないようである。このような疑問はともあれ、本書は著者の五年有余にわたる苦闘の力作であって、本書の出現は宗門上古史の研究に貴重な一石を投じたものであり、その前進を促したものであることはまちがいない。筆者は、本書を縁として著者がさらに研究を深められることを祈るとともに、宗学界においてもさらに活潑な論議が起こり、研究が前進することを期待したい。

（春秋社、昭和五七年四月発行、A5版、三九〇頁、四五〇〇円）

池田魯參

この度、大蔵出版社で企画された、シリーズ「人物 中国の仏教」は、各時代を代表する仏教者の生きざまや思いのたけに照明をあてることによって、平坦ではない中国仏教の歴史的な展開を具体的に読者に提供しようと

するものであり、各書の刊行が期待されるころである。採択された人物が幅広く中国仏教の歴史の全般にまたがっている点は勿論のことであるが、各書が同ようなスタイルで論述され、それぞれの領域における最新の情報

がコンパクトに採録されている点で、ちょっと他には類のない叢書となるであろう。本書『智顛』は、この叢書の第四回配本にあたる。

本書を開いてみると、最初に、田村芳朗氏が「天台智顛の位置と思想」（七〇―一五頁）を論じ、智顛の活動が中国仏教史のなかで、何のような位置を占めるのか、教理史的な意義について概説している。

続いて、新田雅章氏が「天台智顛の生涯と思想」（一七〇―二六頁）について論述する。共著の体裁をとってはいるが、内容構成からも紙数の配分の上からみても、本書が新田氏の論述を中心に行っていることは、瞭然たる事実であろう。

新田氏が執筆した「天台智顛の生涯と思想」の大綱は、第一章智顛の生涯（一九―六〇頁）。第二章智顛の思想（六一―一八二頁）。付論、智顛の著述とその解説（一八三―二二〇頁）の三章で構成されている。

第二章「智顛の生涯」では、一、出家・慧思との出会い（二〇頁）。二、大蘇山より金陵へ（二四頁）。三、天台山時代（三二頁）―隠棲の動機をめぐって・修行の理想境―。四、「三大部」の講説時代から晩年時代（四